

# 2010年サバ類

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数														
	漁獲	産地	輸入	輸出		東京				在庫	加工品				消費支出 生(万円)
				生冷	缶	生	冷	塩干	塩蔵		缶	干	蔵	節	
21	470.9	407.3	50.8	84.1	3.4	11.7	3.1	2.6	0.4	103.3	27.7	21.9	49.0	14.4	1,372
22	458.0	434.4	76.4	120.4	2.9	10.0	3.3	2.7	0.4	64.3					1,292
%	97	107	150	143	84	85	106	101	98	62	0	0	0	0	94

年	価 格								
	産地	輸入	輸出		東京				消費支出 生(円)
			生冷	缶	生	冷	塩干	塩蔵	
21	76	238	89	373	354	484	494	554	1,155
22	78	211	84	373	391	472	463	511	1,101
%	103	89	94	100	110	98	94	92	95

## 漁獲と資源

22年のサバ類（マサバとゴマサバ）の漁獲量は、45.8万トンで前年(47.1万トン)をやや下回ったが、ほぼ近年の平均(50万トン)の水準であった。

マサバ太平洋系群の資源量は、1970年代には400万トン、1980年代前半は150万トン程度で推移したが、1980年代末に加入量の減少と強い漁獲圧により減少し近年では低水準にある。親魚量は1980年代中期の50万～60万トンから1990年代には5万～12万トンへと低下した。親魚量が45万トン以下になった1986年以降は加入量が減少し、かつ年々の変動幅が大きくなった。近年は2004年、2007年に加入量水準の高い年級群が発生、これらの年級に支えられて資源量は増加し、1990～2000年代前半の最低水準は脱しつつある。2009年の加入量水準も比較的高いと考えられる。2009年資源量は68万トン、親魚量は23万トンと評価されている。

マサバ対馬暖流系群の資源量は、1973～1989年は88万～126万トンで比較的安定していた。1987～1990年にかけて減少した後、増加傾向を示し、1993～1996年は110万～137万トンの高い水準に達した。1997年以降、資源は急減し、2000～2007年は50万トン前後の低い水準に留まっていたが、2008年は73万トンに増加した。加入量は1997年以降低い値で推移しているが、2004、2008年にはやや高い値を示した。親魚量は1996年を近年の頂点に2003年まで減少した。2005年に増加したが、その後は再び緩やかに減少している。再生産成功率は1991年以降、比較的高い値を示していて、1995、2004、2008年にかなり高い値を示している。

近年安定している太平洋系群のゴマサバの資源量は、1995～2009年の資源量(7月時点)は、1995年以降の比較的安定した加入量の継続と2度の卓越した高い加入量によって30万トン前後から2004、2005年には60万トンに達する高い水準にある。2005年の65万トンをピークにその後は減少したが、2009年は2007、2009年級群の比較的高い加入量によって52.9万トンと依然として高い水準にある。2010年の資源量は、2009年の値から前進法で推定すると50.8万トンである。なお、2010年の加入量は直近の調査船調査から12億尾と推定している。

また東シナ海系群のゴマサバの資源量は1992～2009年に比較的安定して同程度の水準を保っている。近年では、2005年に高い値を示したが、その後は減少傾向を示している。加入量

は1992年以降、多少は変動するものの、概ね3億尾程度の水準を保っている。近年では、2004年にやや高い値となったが、2005年はやや減少し、その後は横ばい傾向を示している。親魚量は2000～2004年にかけて減少傾向を示していたが、2004年の高い加入量のため2005年に増加した。しかし、その後は再び減少傾向を示している。発生初期の生き残りの良さの指標値になると考えられる再生産成功率は、1993、2004年に高い値を示した他は、比較的安定している。

### 産地水揚量と価格(継続漁港)

22年の産地水揚量は、43.4万トンで太平洋側の好漁を受けて、前年(40.7万トン)を上回った。

価格は、生産の減少したことやサイズも大きく78円で前年(76円)をやや上回った。

### 海域別漁獲量

本年の海域別漁獲量の特徴は、太平洋側の三陸・常磐、東海が好調、東シナ海、山陰、薩南がやや低調で、全国的には北高南低となった。道東海域では、本年も漁獲がなかったが、三陸沖物の水揚げが釧路でみられた。

#### 海域別漁獲量 単位：1000トン

海 域	21年	22年	対比(%)
道 東	0.0	0.0	-
三 陸	88.4	92.2	104
常 磐	80.5	105.8	131
東 海	60.0	68.3	114
薩 南	20.0	19.0	95
東シナ海	116.4	109.2	94
山 陰	35.1	24.3	69
その他	0.0	18.2	-
合 計	400.5	437.1	109

#### 三陸(単位：1000トン)

月	21年	22年
1	0.0	3.5
2	0.0	0.5
3	0.0	0.0
4	0.0	0.0
5	0.0	0.0
6	2.3	0.1
7	7.0	7.0
8	15.6	9.1
9	28.6	15.4
10	20.7	33.4
11	8.8	13.8
12	5.4	9.3
計	88.4	92.2

MAX：H53 69万トン

#### 常磐(単位：1000トン)

月	21年	22年
1	7.9	17.4
2	1.0	7.1
3	2.4	0.2
4	12.2	8.3
5	9.5	2.9
6	3.4	6.0
7	1.2	4.0
8	6.4	2.0
9	1.6	5.7
10	7.8	2.7
11	10.8	23.6
12	16.3	26.0
計	80.5	105.8

MAX：H6 14.1万トン

東シナ海（単位：1000トン）		
月	21年	22年
1	17.1	14.6
2	6.8	7.5
3	5.8	2.1
4	4.0	1.0
5	3.7	3.2
6	2.6	2.0
7	3.4	2.5
8	6.1	2.8
9	10.2	5.2
10	13.3	17.2
11	17.6	28.9
12	25.7	22.4
計	116.4	109.2

MAX：H 8 22.2万トン

山陰（単位：1000トン）		
月	21年	22年
1	8.0	3.7
2	4.6	3.0
3	1.8	1.2
4	0.5	0.4
5	0.5	0.2
6	0.2	0.3
7	0.9	0.2
8	0.4	0.2
9	0.4	0.4
10	9.2	2.6
11	4.4	8.4
12	4.4	3.9
計	35.1	24.3

MAX：H 6 14.1万トン

### 三 陸

本年の三陸の漁は、北上期は昨年並みで低調であったが、南下期には昨年を上回る漁獲がみられた。

本年は昨年より早い7月下旬に仙台湾でマサバ・ゴマサバの初漁があり、昨年より遅い12月まで漁獲がみられた。また本年も7月20日からまき網によるスルメイカの漁獲が始まり、昨年の約1.2万トンを上回る約1.3万トン(小型770トン含む)の漁獲であった。

魚体は、当初2歳魚(2008年級群)主体、後半は1歳魚も混じるようになった。

また、本年のブリ(イナダ、ワカシ)の漁獲は、昨年同様10、11月に集中的に漁獲され、近年では最高の水準だった前年を上回った。

### 常 磐

本年の越冬サバ漁は比較的好調に推移し、33千トンの漁獲で前年(23.5千トン)をかなり上回った。

また、春(5～7月期)の北上期の漁獲はで12.9千トン程度に終わり前年(14.1千トン)をやや下回った、南下群の漁獲は52.3千トンで前年(34.9千トン)をかなり上回った。

本年も北部太平洋海域では、資源回復計画に基づく休漁や時化等も多く操業はかなり制約された。

なお、本年のブリ類(イナダ、ワカシ)の漁獲は、一昨年並みの豊漁で上期、下期後半に集中し好漁がみられた。

魚体は、越冬群はほぼ1歳魚(2009年級群)主体であったが、北上期には2歳魚(2008年級群)も混じり、南下期は、当初2歳魚(2008年級群)主体に後半は1歳魚(2009年級群)主体に変わった。

### 東 海

伊豆諸島周辺を主漁場として、主に産卵群を対象とするサバタモ抄い漁業は、昭和54(197

9)年の17.7万トンにピークに減少しており、近年においても概ね1万トン以下の低調な漁獲で操業隻数も往時に比べ大幅に減少している。なお、22年のサバ類全体の漁獲量は、1,793トン（前年：2,240トン）で前年をやや下回った。魚種別では、マサバが891トンで前年（983トン）を下回り、ゴマサバも902トン（前年：1,257トン）でマサバ、ゴマサバとも減少した。

## 東シナ海

22年前半の年明け後の冬漁はやや低調に推移し、水揚げもやや減少した。また夏場の閑漁期の漁も前年をやや下回ったが、9月以降本番に当たる冬の盛漁期の10月以降好調で前年を上回った。しかし結果的には上半期の不振を反映し昨年をやや下回る水揚げにとどまった。

## 山 陰

この海域で漁況は、年明け後の漁が九州西部同様やや低調に推移し、また閑漁期の夏場の漁もやや低調であった。そして秋漁以降もやや低調に推移し、その結果前年を上回った。

魚体は、2009年級群が主体であった。

## 輸 入 量

本年の輸入量は、7.6万トンで、前年（5.1万トン）を大幅に上回った。これは主にノルウェーからの搬入が年明け後は少なかったが、新物の搬入が前年同期を大幅に上回ったことを反映したものである。本年の搬入ピークは11月集中型で近年にはない傾向を示した上に、極めて高い搬入水準であった。

主要な輸入国は本年も依然ノルウェーのシェアが97%とほぼ全量ノルウェーと言ってもよい。また、それ以外の国ではカナダ、アイルランドが、それぞれ902トン（前年：616トン）、603トン（前年：310トン）、イギリスが98トン（前年：230トン）、中国が180トン（前年：151トン）であった。

本年のノルウェーからの輸入原料は600gサイズ以下が92%（前年：87%）主体に600UPが8%（前年：13%）で、シェアでは600UPが更に減少し、600以下が増加している。また600UPを始め日本とロシア、中国等諸外国との競合関係が顕著になっているが、本年は、ノルウェーサバを巡っては特に600UPサイズでは、買付価格の日本側の優位が目立ちシェアも多かった。

価格は、211円でほぼ前年（238円）を下回った。

また、中国等海外加工が依然活発にみられ、製品輸入も多いが、本年は8,139トンで前年（6,471トン）を引続き伸びている。

## 輸 出 量

本年の輸出量は、昨年やや減少したが再度12万トンで前年（8.4万トン）を上回った。これは国内生産も盛り返したことも影響している。

本年もエジプトへの輸出が最も多く次いでタイ、中国、インドネシア、フィリピンとなっており、東南アジア諸国の伸びが著しい。また、缶詰輸出は2.9千トンと前年（3.4千トン）をやや下回った。

## 在 庫 量

在庫量は、6.3万トンと前年(10.3万トン)を大きく下回った。(調査客体数の減少の影響もある)

これは、輸入の増加がみられたが、生産が減少したことや、輸出量も輸入量を大きく上回っていることなども影響している。

### **消費地入荷量と価格**

22年の東京消費地入荷量は、国内生産が前年をやや上回ったものの、鮮魚向けが少なかったのか、その結果生鮮が1万トンと前年(1.2万トン)を下回った。

また、冷凍は3.3千トン(前年:3.1千トン)、塩干2.7千トン(前年:2.6千トン)、塩蔵0.4千トン(前年:0.4千トン)と冷凍・製品関係は大きな増減はなかった。

価格は、生鮮391円(前年:354円)、冷凍472円(前年:484円)、塩干463円(前年:494円)、塩蔵511円(前年:554円)で、鮮魚が上昇したが、原料・製品は下げた。

また、消費地市場、末端のスーパー・量販店では、時期によってはゴマサバが恒常的に販売されるようになり、鮮魚販売や、加工品にもかなり利用・定着している。なお消費支出をみると数量、金額とも減少した。